

平成19年6月(2007年)No.498

<随想>

日本アマチュア映像作家連盟 総会・大阪大会

多くの方の奉仕で成り立つ大きな催し

日本を縦断する映像発表会で知られる、日本アマチュア映像作家連盟の年次総会は、毎年各地で持ち回りで開催されていますが、今年は大阪が開催地でした。この6月2日～4日の3日間、ホテルニューオータニ大阪の総会から翌日の飛鳥、3日目の奈良と撮影会を実施、無事終了しました。

準備は今年1月から有志が集まって、日程の設定、総会開催のホテル設定、2日目以降の撮影地候補の選定を行い、概算費用の算出、総会並びに懇親会参加者数の想定及び2日目、3日目の参加者数を予想し、参加費(最高額は抑えられている)の概算計算作業を行いました。見通しがつくと、各観光案内所へ連絡し各200部のパンフレットを送ってくれるよう依頼。一方、吉岡世話役の知人が旅行社をやっていたので、そこを通してホテルニューオータニほかに交渉してもらった等の対応があり、東京の川上事務局長とも連絡を取り合って、ようやく方向づけがなされました。

問題は出席者の予測と確認でした。参加者数が少ないと割高になって大赤字になってしまいます。そこで関西の映像作家連盟会員にひとり一人に参加を呼びかけご協力をお願いしました。その結果、一部不本意ながら体調不良の方を除き、関西から連盟会員と家族、及びOMC会員の進藤さん、河合さん、森田さんの3氏を含め総数26名のご参加を頂きました。

これ等を通じて感じたことは、計画立案、実行、確認、連絡調整など、強い奉仕の精神と、全国の仲間を暖かく受け入れたいという気持、それとまず健康でないとやっていけないな、という実感でした。

OMCからは上記3名の方のご協力のほか、総会当日の上映会で機材を借用しました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。(合原記)

6月例会のお知らせ

6月例会は第4土曜日23日午後6時より難波市民学習センターにて行います。会場は冷房が効いていますので、あまり薄着ですと風邪を引きますよ。楽しい例会にお集まりください。作品もどうぞ。

垂井撮影会作品

制作していますか

今回の垂井曳山祭り撮影会作品はもう、まとめられましたか。皆さんにお聞きしますと、今度のが一番難しいと嘆いておられました。動きの少ない子供歌舞伎がメインなので、あの長くゆったりした判りづらいせりふの歌舞伎の場面を、どこで切ったらよいのか、どの部分をどれ位つかったらよいのかお悩みのようです。

一般的に言えることは、歌舞伎の話の筋書きを追っては長すぎてダメだということ。やはり、やはり、宿場町としての垂井、そこに息づく子供歌舞伎がある、といったストーリーがオーソドックスな正攻法ではないかと考えられます。

もっともOMC会員諸氏のこと、人が、あっと驚くような視点からまとめられる方もあると思います。同じ条件で同じ場所で撮影したもので、脚本構成によって、すっかり変わった作品が出来る、ということを撮影会作品で勉強させられます。撮影会作品コンテストにどういう作品が出品されるか、今から楽しみです。

■撮影会作品コンテストは7月例会日の昼

撮影会作品コンテストは7月第4土曜日、28日、午後1時例会場にて開催。10作品以上の場合1人3票(6点)の持ち点にて互選とします。皆さんぜひ出品をどうぞ。

■大阪アマチュア映像祭は11月4日(日)

恒例の中央図書館での大阪アマチュア映像祭は11月4日午後1時からと決定。

■日本を縦断する映像発表会は6月24日

中央図書館にて11時30分開場12時上映

5月例会レポート

5月例会は、シャツ1枚でもよい程の気候の26日第4土曜日に開催。どういうわけか、作品は11本、出席者は24名といういつもより少な目の作品と出席者数でした。撮影旅行へでも行かれています方が多かったのでしょうか。

上総修一郎さんが今年初めて出席されました。海外旅行の後、体調をくずされて、一時入院されましたが、比較のお元気なお

顔を拝見してほっとしました。

作品が少ない分、1本1本じっくり落ち着いて司会の時間が取れてよかったと思います。今月もDVは1本、ワイドが1本、あとは皆ハイビジョン作品ばかりでした。

今月の司会は合原会長、書記、安居氏、映写係、江村、増池、河合の3氏、受付兼照明係は奥、宮崎の各氏の担当で会を進行しました。

■出席者：有村、井上、江村、岡本、奥、上総、紙本、河合、黒田、合原、進藤、関、玉井、鉄具、錦、華岡、藤原、前田、増池、松本、宮崎、森、安居、吉岡の各氏。先月31名の出席に比べ、やや少な目の24名でした。

上映作品(今月講評は安居世話役です)

1. 宮本武蔵の道を行く

紙本 勝さん (13分50秒)

あの剣豪宮本武蔵の足跡を訪ねて紙本さんが歩かれた記録です。「なぜ今更なのか、自分でも判らないが、行ってみてああ、こんなところかと満足感を得る、難儀な話ではある」と冒頭でおっしゃって旅が始まります。まずは智頭急行の「宮本武蔵駅」。ずばり駅名になった地があるのです。ここが生誕地か思うとこれは吉川英治の小説上のことで武蔵自身の著といわれる「五輪書」には「播磨」で生まれたとあるといえます。そこに行くとは紙本さんの歴史上の知識からまた矛盾が生じるというわけでその解決のために再び旅をされます。そして最後は九州の小倉まで行かれる。がなかなか真相はわからない、でも「行ってみて、ああこんなところかと納得」される紙本さん自身も武蔵同様「漂泊」のカメラマンのような気がしました。

2. 飛火野の辺りの鹿

増池 茂さん (8分)

奈良飛火野の静かな風景、鹿がゆったりと数頭芝生に寝そべっています。カメラがまわると十数頭が草を食べています、突然ラッパを吹く人、その音が響く中、あちこちでラッパの音のほうをふり向く鹿たち、やがて集団で鹿たちがゆっくりと集まってきます。どんぐりを入れた籠の周りは何十頭の鹿の群れに囲まれます。充分食べた鹿

はやがて散っていきます。鹿寄せのビデオは今までに沢山見せてもらっていますが、散っていく鹿を丹念に追われたのは増池さんが初めてです。充分食べて満足したのに駆けて帰ることはないだろうと鹿に突っ込みを入れたくなりました。東大寺の近くで女学生が嬉々として若い鹿に餌をやっているシーンの片側で老いた鹿のつぶらな瞳が印象的でした。飛火野と鹿をうまくまとめられていました。

3. 送り火

前田茂夫さん (9分15秒)

お盆に戻ってきた精霊を冥府に送り出す宗教行事が観光化するまでになりました。京都市内から見る五山の送り火は夏の風物詩ですがその現場での撮影は大変だったようです。銀閣寺の近くに奉納する経木の受付があります。経木に祈りの字を書く人、その経木も丸太を割っただけのものもあるのですね。書きにくいでしょうね。その表情をうまくとらえておられました。山の中腹に火床があります。ボランティアの人々が経木を火床に移しています。沢山ならんだポリ容器、防火のための水だそうです。夜になりました。火がつけられます。炎に映える人々の顔、ボランティアの人々だそうです。(観光客はここまでこれません)燃える炎を通して向こうの山に「妙」の火文字、パチパチと燃える音、送り火の最高の瞬間です。送り火のそばで臨場感のあるすばらしいカットをお撮りになるのは、かなりの労力と粘りの時間を要したとお聞きしました。納得のいく作品でした。

4. 悠々一日紀行「御影」

井上勝彦さん (7分28秒)

阪急電車「御影」から駅のパンフを利用して付近を紹介された、しゃれた「悠々一日紀行」です。ナレは奥さん、原稿はパンフ、ナレに合うようにビデオカメラでお撮りになる。それに対象は地元ときいていますから、省力化の最たる作品とご本人の弁。昔から御影は高級住宅街と聞いていましたが一級的美術館があちこちにあり、しかもそれらが個人所有というのですから昔からのセレブは違うなと思いました。撮影の要点に手製のスタビライザーをうまく使いそ

の画面が今回は作品全体に溶け込んでいました。新しい技術の導入はクラブ会員にとって大いなる刺激になります。さらにこれからの作品には井上さんの思いと主張を期待しいところです。

5. 続・山の辺の道を歩く

有村 博さん (9分37秒)

前回の「山の辺の道を歩く」の続編です。今回はJR巻向駅からの出発です。まずは卑弥呼の墓ではないかといわれる箸墓古墳を訪れられます。三脚を立てて歩く姿を自分撮りされます。そして「邪馬台国大和説の根拠になった巻向遺跡のただなかを私は歩いているだ。」と感慨深げに咳かれます。長岳寺では、若いときに見た石棺佛がそこから離れた小高い山の上に立っているのを見つけられました。手を合わされ見上げる有村さんの顔にカットバックで仏さんの「おおよくきたね」と云う親しみをこめた笑み、心が通じあう一齣を見つけたように思いました。有村さんにとっては「山の辺の道」は「ふるさとの道」なのでしょうね。作品全体に「山の辺の道」に対するいとほしさが現れているすばらしいものでした。

6・初夏の長岡天神

奥 宏さん (5分30秒)

5月の始め長岡天神は真っ赤な霧島つつじが満開です。「道真が大宰府に流される前、在原業平とここで遊んだ」と長岡天神の由緒から解説されています。道真公の「魂長くこの地にとどまるべし」の言葉で、長岡天神が創建されたとはしりませんでした。それにしても背丈よりかなり高い霧島つつじ、百数十年になるという真紅の花びら、奥さんの撮られたつつじを見ているうちに道真公の怨霊の色のよう感じがしてきました。人影が少なくなった夕方、つつじの小道を一人で歩けば怨霊たちに会えるかも知れない、でもその怨霊たちは怖くないのです。勝手な想像のつばさが広がりました。落ち着いてよく撮られた作品でした。

7. 乱舞

江村一郎さん (5分00秒)

舞台上で演じている「こいや祭り」を撮影・編集されたものです。それがそう見えな

いところがすごいところ。撮影・編集がうまいからといってしまえばおしまいなんです。もうすこし突っ込んでみたいと思います。まず手持ちで場所とサイズを変えて動きあるカットを撮っておられます。さらに踊っている人を動きながら撮る。さらに江村さんは前からですがバックライトの使い方が抜群です。逆光のカットも視覚的にすばらしい効果があります。クレーンに乗ったカメラが画面を横切ります。これだけの動きとリズムの中ではクレーンで撮ったのかという錯覚まで持ってしまうほどすばらしい素材を撮影されています。ビデオを再度見て分析はしますが、その素材を作品に仕上げる編集能力はやっぱり江村さんの感性だという結論になってしまいます。江村さんのカットをまねて撮ってみても自分のものにするには到底できないと思いました。

8. つけは誰が払うのか

安居利次さん (7分50秒)

家の近くにオスカードリームという大阪市の信託建物があります。それが昨年破綻したことが公になりました。舞洲には焼却炉の煙突が2本になっています。もう1本はスラッジセンターのものでした。オスカードリームや赤字3セクは表に出ましたがスラッジセンターのような表に出ない負債は山のようにあります。これは大阪市だけではなく日本の市町村全体の問題です。その負債を誰がどのような方法で払うのか、私も含めてみんなケ・セラセラです。

9. 花の吉野山

河合源七郎さん (7分58秒)

日本人にとって「さくら」は何故「はな」なのか? 「吉野山のさくらは何故「日本一」なのか」タイトルが出るまでにスーパーの文字が現れます。

そして歴史的に有名な人の歌などを資料に12世紀の古今和歌集ではまだ「さくらばな」だったのが13世紀の西行法師の歌には「はな」と出てそれ以降、日本人にとって暗黙のうちに「さくら」は「はな」になったと納得できる解説をされています。ファイナルカットで編集されたハイビジョンの映像はきれいで吉野山の桜は何故日本一

なのかという問いにもわかりやすく答えられています。広い知識の集積がないとこうゆう構成は出来ません。すごいなあと感心しました。あとさくらの散るカット(今年はずまく撮れなかったそうです)があれば完成です。とおっしゃっていました。

10. かげろい(陰火)

関 剛さん (6分20秒)

人形も水に流すだけでなく火で焼くところもあるんですね。海に流す淡島神社の人形も最後は回収して炉で焼くとのことですが、人形を焼くのを公開しているところは珍しいです。鳥取県まで行って撮られたとか。市松人形のパッチリした目と焼けていく人形の映像を重ねるとショッキングな印象を受けます。それを漢字で表したのが「陰火」なのでしょうか、人形には女の魂が宿るといいます。魂が焼けて出る炎。その炎に感情移入していろいろ連想します。関さんの映像を見ていますと、そうだ、それが「陰火・かげろい」なんだと変に納得させられました。こうゆう題材と構成を考えつかれる頭の構造はどうなっているのでしょうか。

11. 長岡天神霧島つつじ

宮崎紀代子さん (3分10秒)

「つつじに照り映えた参道はなかなかの圧巻です」宮崎さんのチャーミングなナレーションで始まるビデオは6番の奥さん同様つつじの見事な映像を写しだします。ハイビジョン第2作目の作品です。八条が池の中堤から見る浮見堂、なかなか風情があります。太鼓橋から浮見堂までつづら折りの木の橋がかかり人々の人気の高いようです。つつじが池に映えて1年で一番華やぐ季節だそうです。つつじを堪能されたあと天満宮にお参りされます。学問の神様だけあって合格祈願の絵馬が沢山奉納されています。天神様へのお参りが後になっても道真さんは怒られないと思います。奥さんの作品の中で言うておられるようにこの地が一番御気にいられた天神さんなのですから。宮崎さんらしい作品でした。

以上で例会を終えいつものように喫茶組と居酒屋組に別れて二次会を楽しみました。